

---

鐘

ぬじゃわきし

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鐘

### 【Nコード】

N3054P

### 【作者名】

ぬじゃわきし

### 【あらすじ】

音楽的な即興性を文学に応用できないか実験。とにかく、異常な話です。

## （前書き）

一言一句、理解不能な言葉も丁寧に詠むことをおすすめします。音読するといいかもしれません。

赤い魚は怒り狂っていた。なぜか。皆が彼の誕生日を忘れていたのである。なぜだ、あれほど言ったのに。伝わらなかったのか。自分の誕生した貴重な日を忘れるなんて。だが、誕生日は何をもつて誕生日と呼ぶのか。通常、初めて外界に飛び出した日を誕生日と呼ぶが、だがそれでもかつては胎で生きていた事になる。では胎で自分が“発生”し始めた頃が、誕生日か。否。“発生”したという事はその材料がすでに揃っている。それは母体より産まれた。では母の誕生日という話になるが、母とて自分と同様に、その母がいるのだから、真の誕生日は明確ではない。結局突き進めると、我々の祖先否、その祖先である生命のたんぱく質を産み出した地球、地球を産み出した宇宙ということになり、自分が真に“誕生”したのは宇宙が産まれた時となる。それはいつなのだろう。はるか昔か。どれだけ長い年月を経たのだろう、と思うのは、我々に時間感覚があるからだ。感覚とは比較の上で判断されるため、我々は何かの時間と比較して、時間感覚なるものを形成している。つまり自分が死ぬまでの時間。寿命。そりゃ自分の生涯と比べたら、宇宙は長いに決まっているだろう。だが生涯と比べると、産まれた時間がつきりしないのだからもともと比較のしようがない。だが漠然と自分という生物ができあがった時間は推測できよう。もちろん、それは曖昧で、憶測の域をでない。だが人は憶測に過ぎない物を明確だと思ふ時がある。例えば、ここで太郎と次郎が会話しているとすると。太郎から言い始める。「そういえばさあ、昨日、赤い魚の誕生日だったんだよね。」「あ、忘れてた！どうしよう！」「とりあえずお詫びを言って、プレゼント買おうよ。」「いいねえ！何買う？」「インテリアの珊瑚とか買ったら喜びそう。」「そうだね。」「赤い魚って何歳なの？」「223歳」「うわああ長生きだねえ。」「そうだよ。長生きでなくちゃ。」「そんなに生きてて飽きないのか

なあ。」「さあ。まあ、僕たちの方が寿命短いからそう思うんじゃないか？ たぶん赤い魚にとつて時間の流れは遅いんだよ。」「そんなもんかねえ。」「そうなんだよ！ いいかい？ こうやって時間は流れてる。だから時間は流れてる。時の流れとはまさしくも、そう、生きていうという、そんなわけで、だから、明日もそうなる。おそらく明日は晴れるだろうが、そんなの誰が言えるか。分からない。分らない事があまりにも多いために、忘れる時がある。それは良くないことだ。良くないと知りつつやるのは人の悪事の本質。そう。すべては選択によつてできる。鬼の居ぬ間に心の選択。いや、洗濯。洗濯機は相変わらず起動している。いつ、洗い終わるのだろうか。洗濯機は中で服をゆさゆさと揺らしている。振り回された服はもたえ苦しみ、苦痛の叫びをあげる。叫び声を聞いて、人が現れる。人は言う。「おまえらのいつてることはなあくっちゃらぶちやけのふろんぽくしよんのくらすびどるてんかんたびありすんむたたびびくらんすらっぱほうこうアーツ！」その時鐘が鳴る。くわあああああああああん……。さて、太郎は狸と行動を共にしていた。狸は太郎に、ためため言うていた。太郎は負けじとためため言い返した。ためためためためためためため。うためたうためたうためた。ためたためためためためため。ためたとろめたとろめたとろん。たとろんとろんとろんぱ。とろんぱとろんぱとろんぱ。とろんぱとろんとろんととろん。とろんととろんととろんと。とろんととろんとよく煮込んだとろとろスープ、これになが入ってます？ ふしぎなふしぎなぐざいがあるよ、神経強壮ととろんぱ。赤い魚はスープを見ると、大声あげて泣き叫ぶ。なぜか、太郎が理由をきけば、このスープには記憶がある。誰の記憶か分からない、だが自分はそれを見たたん、なんだか感極まったのさ。赤い魚はそう言って、静かに地面に沈んでいく。気がつけば、そこにはいない。遠い国へと飛ばされた。そのときふたたたび鐘が鳴る、くわああああああああん……。あれ？ ここはどこなんだ？ 見たこともない場所だ。自分の意識では知覚した事のない未知の場所。知らない事は恐怖である。あ、

なんか見かけない人間が僕に話しかける。やめろ。やめろ。「えっ  
ちやびくぱんとわ?」おまえらの言語は分からない。諦める。「う  
っちやびどーどゆー」二人の異国人は僕の目の前で会話を始めた。  
「ふなむーぐっちやびどろす」「うだべごんちゃんび?」「おーう、  
びろぶふなくらびん、どーす。」「あらびのん、ふらり斬?」「お  
うおうおう! くっぱり死もふらめんとう」「おーど喜ーるふらまり  
て」「だん酷<sup>こく</sup>りぎぬもー」「さぜ?」「がって、ぼろぶのあ、みよ  
くらい」「おろふのわ?」「おう、ころふのわ、もくない」「あ  
んでころすのは、のくないんば?」「ばって、ころふのは、たいへん  
なことだよ。」「いいざないか、こいつはよほものだ」「よそもぬ  
とて、にんげんだ、ころすのは」会話を聞いているうちに自分をよ  
そ者として殺そうとしている事に気づき、彼は驚いて言った。「ま  
つてくれ! ここで迷ったんだ! 殺さないでくれ!」異国人の一人は  
にやりと笑って、言った。おまえはよそ者だ。だから、自分達とは  
違う。顔の形から手足の数、体の色から寿命まで。おまえは何歳か  
? 223歳か。長生きだな。だが、俺たちは70歳がせいぜいだ。  
そんなに寿命が違つと、時間感覚も違つだろう。そう。実はいま  
まで、普通に話していたが、君には通じなかった。だから時間感覚に  
合わせてゆつくり話したら通じた。そうだ。君にとつて私達の動き  
は早い。この会話を通じて証明された。だから、赤い魚と僕たちの  
時間の流れは違つんだよ。」「なるほどねえ。ところで誕生日プレ  
ゼントどうする? 珊瑚は高いよね。」「どうしよう! あ!」「どう  
した!」「狸さんに相談して、彼特性の神経強壮スープとろんぱ  
はどう? これからの長生きを祝して。」「いいねえ!」この例を見  
ても分かるように、人は憶測に過ぎない物を、明確だと思つて。と  
ろんぱには悪い思い出があるのに、二人は喜ぶと勝手に思っている。  
だから私は泣いた。とろんぱを見たとき泣いた。その結果この有  
り様だ。異国人には悪いが、私は人間と同じ時間を持っている。言  
葉が分かりやすくなつたのは、偶然だ! そう言つと異国人は去つた。  
その時鐘が鳴る、くわああああああん! 一人残つた赤い魚



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3054p/>

---

鐘

2010年12月4日17時40分発行